

資料紹介

木村探元の印影

—下河辺行廉の模刻印章—

山下 廣 幸

黎明館所蔵の資料中に「探元印影」と題した掛幅がある。木村探元が使用したと思われる印章を模刻し、それを印影としたものである。

本稿は、模刻印ではあるが、これらの印影を紹介することによって、探元が使用していた印章を研究するうえでの一助にでもなればと思つて稿を草したものである。

木村探元については、「薩藩畫人傳備考」（井上良吉編）、「木村探元小傳」（公爵島津家臨時編輯所編）などに詳しいが、ここでは、その概略を紹介する。

木村探元は、延宝七（一六七九）年七月十八日、鹿兒島に生まれ、明和四（一七六七）年二月二日、八十九歳の長寿で没した江戸時代中期の薩摩藩画壇を代表する狩野派の画家である。

幼名を金平と言い、後金左衛門と改めるが、元禄四（一六九一）年、十三歳の時に、郷土の画家小浜清兵衛常慶について画を学んだ。同八年には、時員と号しているが、この頃のものと思われる作品（黎明館に「寿老人図」がある）も数点現存している。同十二年には、守廣と号している。

元禄十六（一七〇三）年、二十五歳の時には、江戸に出て、狩野探信守政の門人となったが、この入門については、逸話的な話が残ってい

る。当時流行の狩野派画家の第一人者は、狩野養朴常信であり、あえて探信の門人となったのは、その父探幽の収集した和漢の名画を見たいためであり、また、それらの探幽の縮図を写したいためであったと言ひ伝えられている。

宝永四（一七〇七）年、二十九歳の時には、藩主吉貴から剃髪すべきの命があり、探元と名を賜った。

享保十九（一七三四）年、五十六歳の時には、近衛関白家と呼ばれ、門人の押川元春、能勢探龍を伴い、十月に京都に到着した。鹿兒島に帰つたのは、翌年五月である。この間、法橋に叙せられ、近衛家のために花鳥図屏風一双や山水図屏風を描いた。また、禁裏御用の衝立や屏風を献上し、近衛家から大貳の呼名を賜り、近衛家久卿の前で席画も行った。

宝暦十一（一七六一）年、八十三歳の時には、藩主重豪のために画を描き、褒美として白銀を賜り、これで三晝菴を造立した。

この六年後の明和四年に没し、松原山南林寺に葬られたが、八十九歳の生涯を通じて多数の画を描いたほか、書、茶道、華道、詩歌などにも優れた才能を発揮した。また、書画、陶磁器などの鑑定も良くしたと伝えられている。前述した上京中のできごとを記した「木村探元上京日記」の中にも、和漢の名画を数多く見た記事があり、現在、国の重要文化財

に指定されている「青磁茶碗（銘 馬蝗絆）」（東京国立博物館蔵）を角倉家で見ることが図入りで記されている。このように、探元は単に画のみにとどまらぬ幅の広い文化人、風流人であったと思われる。

雅号も数多く使っており、十数種類が確認され、印章も六十顆余りを使用していたようである。

主な雅号としては、時員、守廣、探元齋、黄瑞居士、黔嵐木邨々子、懷雲、淨徳堂法淨、大貳法橋、三晝菴、斗山玄風、李瞻、虚中、静隠、梅下隠叟、啜茶翁、麟照、細篁廬、清山古人、晧山などが知られている。

本稿で紹介する印影は、下河辺行廉が模刻した印章によるもので、掛幅仕立てになっている（写真一）。本紙の大きさは、縦二二六、五×横



（写真一）探元印影の全体

三二、〇センチメートルあり、紙本である。本紙の上部に隸書風の文字で「探元印影」とあり、その下方に四列にわたって五十四個（うち一個は、同印が二回押されているために、五十三種類である）の印影が押さ

れている。さらに印影の左側部分に二行にわたって、次のような添書が墨書されている。

下河辺藤藏名行廉號細香蘆字書於能勢一清通茶道常追慕靜

隱翁筆意此印皆係行廉摹刻

行廉死後婦岩崎寄氏所有寄氏与木村氏：又附與予而後有

故返木村氏其後不知所在焉

甲川識 ㊦

これによると、この印影のもとになった印章は、下河辺行廉が模刻したもので、行廉の死後（明治二十一年以後）、岩崎寄氏のものとなり、その後木村家と何らかのいきさつがあった後に、甲川（小松文雄）氏が、一時所有されていたが、さらに何らかのわけがあって、再び木村家へ返

却され、その後、これらの印章は行方不明であると解釈できる。

ここで、小松文雄氏が画家であり、書家であり、また篆刻も良くされた人であったこと、さらに前述のような添書を付していることなどを考

えれば、この印影は、同氏によって作成されたと思われる。



(写真二) 添書にある小松文雄の落款

下河辺行廉は、「薩藩畫人傳備考」によれば、「文政十二（一八二九）年九月十九日に生まれ、藤藏と称し、細香齋、桑蔭、玄香堂、觀耕堂、景洲、老翁翁などの号を用いた。画は、能勢一清に学び、また、詩歌に心を寄せ、書を良くし、茶道にも通じていた。明治二十一（一八八八）年十二月十日に没し、南林寺墓地に葬る」とある。

行廉の作品は、余り多く見たことはないが、黎明館の寄託資料中に「豊葦原日之出図」「安宅関弁慶図」「蜻蛉図色紙」などがあり、幕末から明治にかけての郷土の狩野派画家と似たような作風である。

前述の添書の文中に出て来る岩崎寄氏については、現在のところ、どのような人であったか不明である。

小松文雄は、名は重清ともいい、甲川、幽篁、芋国などと号し、郷土の画家佐多椿齋の三男で、文久元年（一八六一）年九月二十八日に生まれた。父に画を学んだ後、東京に出て柳田龍雪や橋本雅邦について、その画論を聞き、かたわら各派の画家とも交り、十数年の研究の後帰郷し

て教職につき、書画を中心にして多くの子弟の教育にあたった。昭和十三（一九三八）年二月十七日、七十六歳で没した。

探元の印影としては、印影を写したものが、「薩藩畫人傳備考」にも六十種類掲載されている。おそらく、この「探元印影」も、この本に引用されたものと思われ、すべての印影が掲載されている。

本稿では、便宜上、これらの印影に右上方から下方に一、二番の順に番号を付けて、篆刻文字の解読を試みたが、不明のものもあり、また、読み誤ったものもあるかもしれないので、先輩諸氏の御指摘をお願いしたい。

最初にも述べたが、この印影は、下河辺行廉が模刻した印章によるものであるが、木村探元が実際に使用した印章を知るうえで、何らかの参考になれば幸いである。

印影の解読

- 1 白文方印 「静隠」
- 2 白文方印 「虚中」
- 3 朱文方印 「探元」
- 4 朱文方印 「法浄」
- 5 白文方印 「薩陽畫榿」
- 6 朱文方印 「徳」
- 7 朱文方印 「聽鳥觀魚」
- 8 朱文方印 「探菊」
- 9 朱文方印 「清山古乃人」
- 10 白文方印 「黄瑞居士」

- 11 朱文方印
〔一號李瞻〕
- 12 朱文長方印
〔淨德堂〕
- 13 白文長方印
〔此中艸々〕
- 14 白文方印
〔李瞻〕
- 15 白文長方印
〔任吾者〕
- 16 朱文方印
〔薩陽元圖書〕
- 17 朱文方印
〔淨名弟式流〕
- 18 白文方印
〔靜隱虛中〕
- 19 白文方印
〔澹泊明志〕
- 20 朱文方印
〔木村之章〕
- 21 白文方印
〔木村氏〕
- 22 白文方印
〔法橋探元〕
- 23 朱文方印
〔長歌思郢〕
- 24 朱文長方印
〔榎下隱士〕
- 25 白文方印
〔天外懷雲〕
- 26 白文方印
〔行有雀相隨〕
- 27 朱文方印
〔山水生中佳式笑〕
- 28 白文方印
〔颯問府世臣〕
- 29 朱文長方印
〔淨德堂〕
- 30 朱文方印
〔一號黔羸〕
- 31 白文方印
〔淨德堂法淨居士〕
- 32 朱文方印
〔黔羸別號郢々子〕
- 33 朱文長方印
〔樸華報春早〕
- 34 白文方印
〔探元一字李瞻〕
- 35 朱文方印
〔黃瑞居士〕
- 36 朱文方印
〔薩州武臣木部々子圖書〕
- 37 朱文方印
〔淨德堂法淨〕
- 38 白文方印
〔三晧菴主〕
- 39 朱文方印
〔靜隱虛中〕
- 40 白文方印
〔大貳法橋探元〕
- 41 朱文方印
〔細篋廬虛中〕
- 42 朱文方印
〔在家僧式晧菴名靜隱〕
- 43 朱文長方印
〔書畫併學〕
- 44 白文方印
〔真趣天然〕
- 45 朱文瓢形印
〔大貳探元守廣法橋〕
- 46 白文方印
〔在家僧靜隱式號虛中〕
- 47 白文長方印
〔黃金難買式生間〕
- 48 同印
〔只將一朵南枝勝〕
- 49 朱文長方形
〔盡受群華北面降〕
- 50 朱文長方印
〔村々子〕
- 51 白文方印
〔于青雲而直上〕
- 52 朱文方印
〔三晧菴主人靜隱〕
- 53 朱文瓢形印
〔虛中〕
- 54 白文長方印
〔鷲鷲藏雪〕

(写真三) 探元印影 (印影は実物大である)

1



2



3



4



5



6



7



8



9



16



13



10



17



14



11



18



15



12



25



22



19



26



23



20



27



24



21



34



31



28



35



32



29



36



33



30





43



40



37



44



41



38



45



42



39

49



46



47



50



48

